

「自分ごと」としてかかわり方を考える社会科学習

－ 5年「自然災害の防止」の実践から－

小倉 勝登

1. 課題意識

社会科部では、研究テーマを「身に付けた社会的事象の見方や学び方を生かして、学びを深める子の育成一質の高い話し合いを目指して、社会科学習における指導の系統を探る」としている。ここに掲げている「見方・考え方を生かす」とは何だろう。

社会科学習において、子どもたちが、社会的事象の見方を積み上げたり、学び方を生かしていく大前提になることは、社会的事象に対して、「自分ごと」として関心をもち、かかわり方を考えていくことである。そのためには、「自分ごと」として捉えられる教材の吟味・開発が不可欠である。また、身に付けた社会的事象の見方や学び方をいかす場面をくりかえし意図的に設定することが重要である。

そこで、本実践を行うに当たっては、(1)「自分ごと」になる新教材の開発、(2)「見方や学び方」を生かす学習場面を設定することの2つを実践の目的とする。

(1)「自分ごと」になる教材の開発ー新単元「自然災害の防止」の教材開発ー

新学習指導要領では、第5学年の目標に「自然災害の防止の重要性について関心を深めること」が加えられた。第5学年の内容(1)エ「国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止」では、地震や津波、火山活動、水害や土砂崩れ、雪害などの被害の様子や国や県などが進めている対策や事業を取り上げ、環境保全のためには国民一人一人の協力が大切であることや国民一人一人が防災意識を高めることが大切であることに気付くように配慮するとされている。

「自然災害の防止」という内容は、子どもにとっても「自分ごと」としてかかわり、未来を見つめていくことができる内容である。ここでは、特に、「地震災害」を取り上げ、日本は世界の中でも地震が多いという国土の特色や地震災害の被害の大きさを理解させ、地震災害に備える国や地方自治体による取組や地域での取組を具体的に調べ、その重要性や国土にくらす一人として自分がどのように行動すべきかについて考えさせる。そのことにより、自然災害の防止の大切さに気づき、防災のための様々な対策や事業に関心をもち、防災に対する計画や取り組みに参加・協力しようとしたり、普段から自然災害に対する備えをしていこうとしたりする態度を育てることができると思う。

(2)「見方や学び方」を生かす学習場面の設定

「身につけた社会的な事象の見方や学び方を生かす」ためには、見方や学び方を生かして学習する場面や展開を意図的・計画的に設定する必要がある。そのためには、どのような社会的な見方を積み重ねたいのか、学び方をどのように生かすのかを明確にし、それに合わせた場面設定を行うことが大切である。

例えば

- ・類似した単元で身につけた見方や学び方を生かす
- ・1時間1時間の授業ごとの積み重ねを大切にす
- ・見方を変えたり、発展させたりする
- ・自分の考えを練り上げる

などの話し合いの活動を工夫する必要がある。「見方や学び方」を生かす学習活動を繰り返すことで、一人一人の学びが深まるものと思う。

2. 研究の視点・手立て

(1) 「自分ごと」としてとらえさせる教材の開発・吟味の視点から

①自然災害として、「地震」を取り上げる。

我が国は、自然災害の多発する地域である。平成16年新潟県中越地震、平成19年能登半島地震、そして、昨年は岩手・宮城内陸地震、岩手北部地震が発生した。特に、岩手・宮城内陸地震の際の山の崩落は、大変衝撃的な出来事だった。これは、森林は自然災害の防止に役立っているが、それだけでは限界があることを物語っている。また、わたしたちが生活する関東地方は、M7クラスの大地震が今後10年間では30%、30年間では70%の確立で発生すると予測されている。そして、その被害は甚大なものになると言われている。まさに、他人事ではない。自分ごととして考えられる、いや自分ごととして考えなければならない教材と言える。今や防災に関する取り組みは、現代的な課題であると言える。

また、減災に関する国や都、そして地域などの具体的な取り組みを調べる活動を通して、人と人とのつながりの大切さや自分自身の災害への準備の仕方など十分に考えを深めていける教材である。

②切実感をもって、実感的に捉えさせる。

実際の地震の映像や写真資料とともに、最近発生した地震の記録や1週間の地震発生資料、地震発生ドットマップ（世界・日本地図）、首都直下型地震に関する予測データなどの統計資料や地図等を活用し、日本では地震が日常的に発生していることや世界的な地震国であることを捉えさせる。そして、地震の備えが将来にわたって誰にでも必要であることを実感させる。

③人のはたらきを見せる。

東京都防災管理課で実際に防災対策に努めるIさん、防災に向けて地域の協力体制や他地域との連携の構築に努力する商店会のFさんの具体的な取組と防災に対する思いを教材化し、身近で日常的な防災への取組に気付かせ、人のはたらきに共感しながら学習を深めさせる。

<p>◎東京都防災管理課 Iさん</p> <ul style="list-style-type: none">・東京都の取り組み（公助）の話「最悪の事態を考えて準備」「防災はみんなで」「助けてもらうではなく、自分の命は自分で守る」・Iさんの思い→より「自分ごと」に	<p>◎W商店会エコステーション Fさん</p> <ul style="list-style-type: none">・地域の防災の取り組み（共助）の話「日頃から人と人とのつながりをつくるのが大切」・地域社会の形成に努力する人との出会い→自分自身の具体的な取り組みのイメージを
---	---

(2) 「見方や学び方」を生かす学習場面の設定の視点から

①国や東京都（公助）・地域（共助）・自分自身（自助）の3者から考えさせる。

それぞれの立場から追究させることで、震災の被害を最小限に抑えるためには、公助・共助・自助それぞれが、災害対応力を高め、連携することが重要であることを捉えさせる。

②前時までの見方を生かして、取り組みの社会的な意味を考えさせる。

防災とはかかわりのないように見えるFさんの取り組みが、真の目的が防災であるという「なぜ」「どういうこと」をこれまで身につけた見方をつなぎ合わせて考えることで、Fさんの取り組みの社会的な意味を考えさせる。

③自分の考えを練り上げる話し合い（会議）の時間を設定する。

地震災害を最小限に抑えるために、みんなですべきこと、自分にできることを考え、多様な立場から防災について考えたことを表現し、意見交換していく防災会議の時間を設定する。

3. 授業の実際

(1) 単元名 『自然災害の防止』

(2) ねらい

日本の地震の発生状況と防災・減災への国や地方自治体の取り組み、地域の人々の取り組みについて調べることを通して、自然災害が起こりやすい我が国において、国民一人一人が防災の意識を高めていく必要があることを考える。

(3) 授業の分析・考察

① 単元を通じた考察〈子どもの反応と教師の手だてをもとに〉

主な学習活動	A 児	B 児
<p>■地震災害の映像や写真、新聞記事などから、被害の大きさや発生の理由について考える ①</p>	<p>私たちは実際に大きな地震を経験はしていないけど、<u>今回のビデオで私たちに出来ることはあるのだろうかと考えました。前々から用意することが大切だとあらためて感じました。</u></p>	<p>ビデオをみて、地震の被害はとて大きいことがわかりました。だから、少しでも被害を防ぐために対策をしたいと思います。</p>
<p>《考察》実際に地震被害の様子や災害にあった人々の様子を映像や写真で見たり、担任の地震体験を聞いたことで、A・B児ともに地震災害の大きさに気付き、被害を少なくするためにはどうしたらいいのか、災害の対策や用意に目を向けていく姿が見られた。</p>		
<p>■日本の地震災害の現状について国土の特徴と関連づけながら調べ、学習問題をつかむ。 ②</p>	<p>日本は他の国に比べると、とても地震が多いので、<u>なんだかいつも大地震がなくてありがたい</u>と思いました。また、<u>地震の準備を全然していません、少しあまく見ていたのでこれからは準備をしておきたい</u>と思いました。</p>	<p>日本は4つのプレートに囲まれていて地震多いことはさげられない。でも、地震の被害を最小限に防ぐために対策をたてたり、耐震補強をしたりすることはできるので、<u>家ではどんなことをしたらいいか考えたい。</u></p>
<p>《考察》まず、資料を提示し、日本の国土の特徴から世界の中でも地震が多い、地震大国日本を実感させた。また、「1週間の関東地方の地震の発生データ」や「今日の地震発生データ」、「M7以上の地震の発生可能性」の資料を示したことで、A児は「地震の準備を全然していません、少しあまく見ていたので準備をしておきたい。」と感想にまとめ、B児は、「家でどんなことをしたらいいのか考えたい。」と感想にまとめた。これは、A・B児ともに地震災害を自分事としてとらえ、自分自身ができる対策や準備について真剣に考える姿ととることができる。</p>		
<p>■国や東京都、自分の住んでいる区市や地域の防災の様々な</p>	<p>東京都防災課のIさんの「自分で守る」と言うことは厳しいけど、たしかに本当のことだと思った。被害を最小限にする</p>	<p>被害を最小限にいくとめるために、都や国は色々なことをしているのがわかった。でも、<u>国や都、他の人にまかせてい</u></p>

取り組みについて調べる。 ③④

ためには、且ごろから準備しておくことが大切だし、国・東京都・地域、自分が協力しなくては、と思った。

ただ、自分から安全対策など積極的に行動しなければいけないと思った。

《考 察》インターネットや東京都防災管理課の人の話、本や家の人の話をもとに地震災害への対策を調べる活動をしたことで、国や都が様々な取り組みを行っていることやA児の「国・東京都・地域、自分が協力しなくては、と思った。」のように、国や都、地域や自分が連携・協力して災害防止にあたる必要性に気付くことができた。また、東京都防災管理課の人の話を聞いたことで、B児は 国や都が自分達のために様々な対策を行っていることを理解した上で、他人任せではなく、自分たちも積極的にかかわっていくことの大切さに気付いていった。

■早稲田商店会による「ラッキーチケット回収機」の活動から、人と人のネットワークづくりが防災にとって大切であることを考える。 ⑤

商店会のFさんの「ラッキーチケット回収機」のアイデアは、とても良いと思いました。商店街をにぎやかにするだけでなく、人と人とのつながりもできて、防災という目的があるのにおどろきました。近所の人と知り合っておけば地震が来た時、互いに協力して命が助かるのもっと近所の人と知り合いたい。

ペットボトルを回収するということから、それが防災になるのはすごい。やはり、地域などのネットワーク、人間関係はとても大事だということがわかりました。ぼくは、近所の人などとあまり付き合えないので、出会ったらあいさつをするなど、少しでもコミュニケーションがとれるようにしたいです。

《考 察》実際に地域で日常的に防災に取り組んでいる人の活動を取り上げることで、災害が発生した時は、「人と人をつながり」が命を救う大きな力であることに気付くことができた。そして、地域との交流があまり盛んではない本校の児童であるA・B児は、改めて地域の方々とのかかわりが大切であること、そして、それは、普段の挨拶や行事への参加という自分たちにもできる取り組みであることにも気付くことができた。

■これまでの学習をもとに、国民の一人一人の災害に対する正しい知識や事前の備えをすることが被害を最小限におさえるために大切であることを考える。 ⑥

(主張の視点)
地域の人をつながり
地震の時、助けてもらえるのは、家族や親戚や国ではなく、近所の人たちが一番多いので、たくさん近所の人たちともっと知り合って、仲良くなっておくと良いと思いました。また近所の人たちと情報を交換できるので良いと思いました。

(主張の視点)
国・都（公助）の取り組み
Iさんの話から国や東京都が行っている「公助」は常に最悪の状況を考えて、地震予知や耐震工事、土砂防止ネットの設置、非常食の用意、緊急地震速報やハザードマップなど対策を立てているので防災には、欠かせない。

日本は4つのプレートに囲まれていたり、位置的に自然災害がたくさんおこる

日本は海に囲まれていて、プレートにも囲まれているため自然災害、特に地

<p>国なので、たくさんの被害が出る。</p> <p>そんな自然災害の被害を少しでもへらすためには、公助、共助、自助がある。日頃から準備しておくことで二次災害を防げる。また、いざとなったら「助けてもらおう」と考えているのはいけない。準備をする時は、いつも最悪のことを考えなければいけないのだ。</p> <p><u>防災会議を開いて、結局、一番大切なのは、みんなと協力することだと思った。</u>私の家では、地震の対策や避難訓練をしていない。<u>「それでもいいや」と思っていたけれど、</u>本当の地震が来たときに適切な行動ができるように、みんなで話し合っパニックにならないようにしておきたい。</p> <p>私はこの学習を通して、地震がとてもこわいと改めて感じた。<u>明日来るかもしれないし、今、来るかもしれない。そんなふう考えるようになった。</u>これからは、<u>しっかりといつ地震が来てもいいように物の準備や心の準備をしっかりとしておきたいと思った。</u></p>	<p>震がとても多いことがわかった。また、日本は山地が多く、川も短く急なので、被害が大きくなりやすい。だから、被害を最小限にいくとめるために色々な人が色々な取り組みを行っている。その取り組みである「公助」「共助」「自助」は連携している。</p> <p>まず、国や都などが行っている「公助」では、地震予知や耐震工事、土砂防止ネットの設置、非常食の用意などの備えをしている。他にも緊急地震速報やハザードマップなどの情報を流している。</p> <p>次に、地域での「共助」では、防災訓練や地震体験をしたりしている。早稲田商店会のFさんは、「ラッキーチケット回収機」を使って防災をしていた。町の活性化も図れて一石二鳥だと思う。</p> <p>自分での「自助」では、自分が行えることを考える。<u>ぼくは、公助や共助ばかりにたよらず、自分の判断で行動したり、家族と相談したりして、自分の力でもできる限り被害を最小限に防ぎたい。</u></p>
---	--

《考察》学級の防災会議を開き、それぞれの考えを発表し合う活動を最後に設定した。ここでは、これまでの学習を生かして自分の考えをぶつけ合うことができた。その中で、再度、災害の防止のために自分たちでもできることを考えさせた。その結果、A児は、これまでの「それでもいいや」といった他人事の防災からいつ発生するかわからない地震への心と物との準備の大切さに気付くことができた。B児は「公助」「共助」ばかりにたよらず、自分自身で自分自身の身を守ることが大切であることに気付くことができた。これらの姿は、それぞれの防災への意識が高まったものと考えられる。

②「見方や学び方」を生かす場面での分析・考察

今回の実践では、「見方や学び方」を生かす場面を意図的に設定した。1つは、国や東京都（公助）・地域（共助）・自分自身（自助）の3者から調べさせ、それを整理して考える場面。2つは、W商店会のFさんの取り組みの意味を考えさせる場面。3つは、自分の考えを練り上げる学級防災会議の場面である。それぞれの場面で子ども一人一人の見方の深まりや「自分ごと」としてかかわり方を考える姿をみとることができた。そこで、次に、子どもたちの反応を通して、2つの場面から検証する。

《W商店会Fさんの取り組みの意味を考える場面》

○ラッキーチケット回収機

・ペットボトルや空き缶を回収すると、W商店会で使えるラッキーチケット（商品券）がもらえる。

→回収した人もお店も得をする。

→買い物客が増える。

しかし、実は・・・

☆本当の目的は『防災』←「どういうこと？」

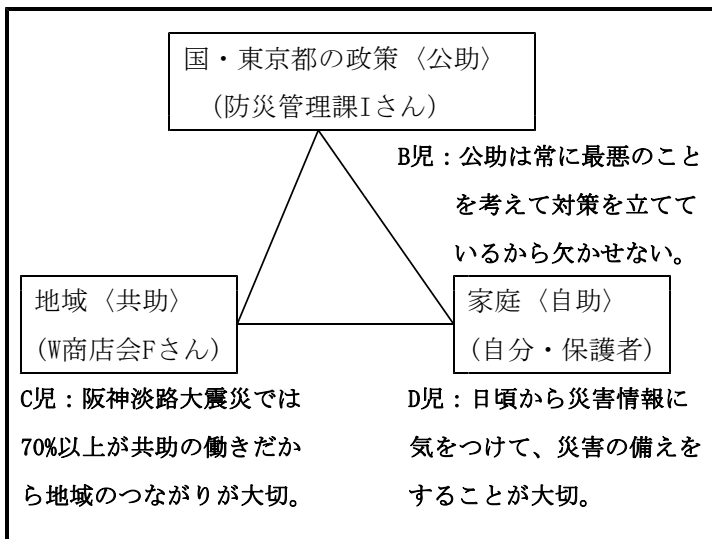
※前時までの見方をつなぎ合わせて考える

○Fさんのアイデアは、とても良いと思いました。商店街をにぎやかにするだけではなく、人と人とのつながりもできて、防災という目的があるのに驚きました。

○人と人との信頼関係をつくりあげるといふスケールの大きなことをしていると思うと僕もWまでいくこと出来ないけど、同じようなことはできると思うからやりたいと感じた。

Fさんの取り組みの社会的な意味を考えたことで、Fさんの働きに共感し、より「自分ごと」となり、防災への考え方が深まった。

《自分の考えを練り上げる学級防災会議の場面》



○防災会議を開いて、結局、一番大切なのは、みんなと協力することだと思った。私の家では、地震の対策や避難訓練をしていない。「それでもいいや」と思っていたけれど、これからは、いつ地震が来てもいいように物の準備や心の準備をしっかりしておきたい。

自分の視点から主張するとともに、他の視点からの友達の主張を聞き、話し合いを進めていくうちに、「結局、一番大切なのは」という子どもの反応からもわかるように、それぞれが欠かせないことや連携・協力の大切さを再確認していった。そして、最終的に他人事の防災意識から、「自分ごと」の防災意識へと高まっていった。

4. まとめ

(1) 「自分ごと」としてとらえさせる教材の開発・吟味の視点から

「地震」という自分とかかわりの深い身近な災害事例を教材化したり、W商店会のFさんのような防災に向けて地域の協力体制の構築に努める人や東京都のIさんのような公共的な取り組みに努力している人のはたらきを教材化したことで、子どもたちは社会的事象に対して「自分ごと」として関心をもち、調べ、かかわり方を考えていく学びの姿をみとることができた。

しかし、一方で、単元全体をみると、自然災害と国土環境の関連をはかる学習が十分ではなかったといえます。そのことは、子どもたちの反応にも「日本の国土は・・・」や「わたしたちのくらしと・・・」という反応があまり見られなかったことからわかります。今後、国土理解の側面を重視した展開や単元構成について検討が必要である。

(2) 「見方や学び方」を生かす学習場面の設定の視点から

学級防災会議を開き、自分の視点からの主張や異なる視点からの主張による話し合いを行い、防災について再度考えを練り上げる時間を設定したことにより、協力の大切さを実感（再確認）することができた。このことにより、国土にくらす一人としての自覚を高めることができたと考える。